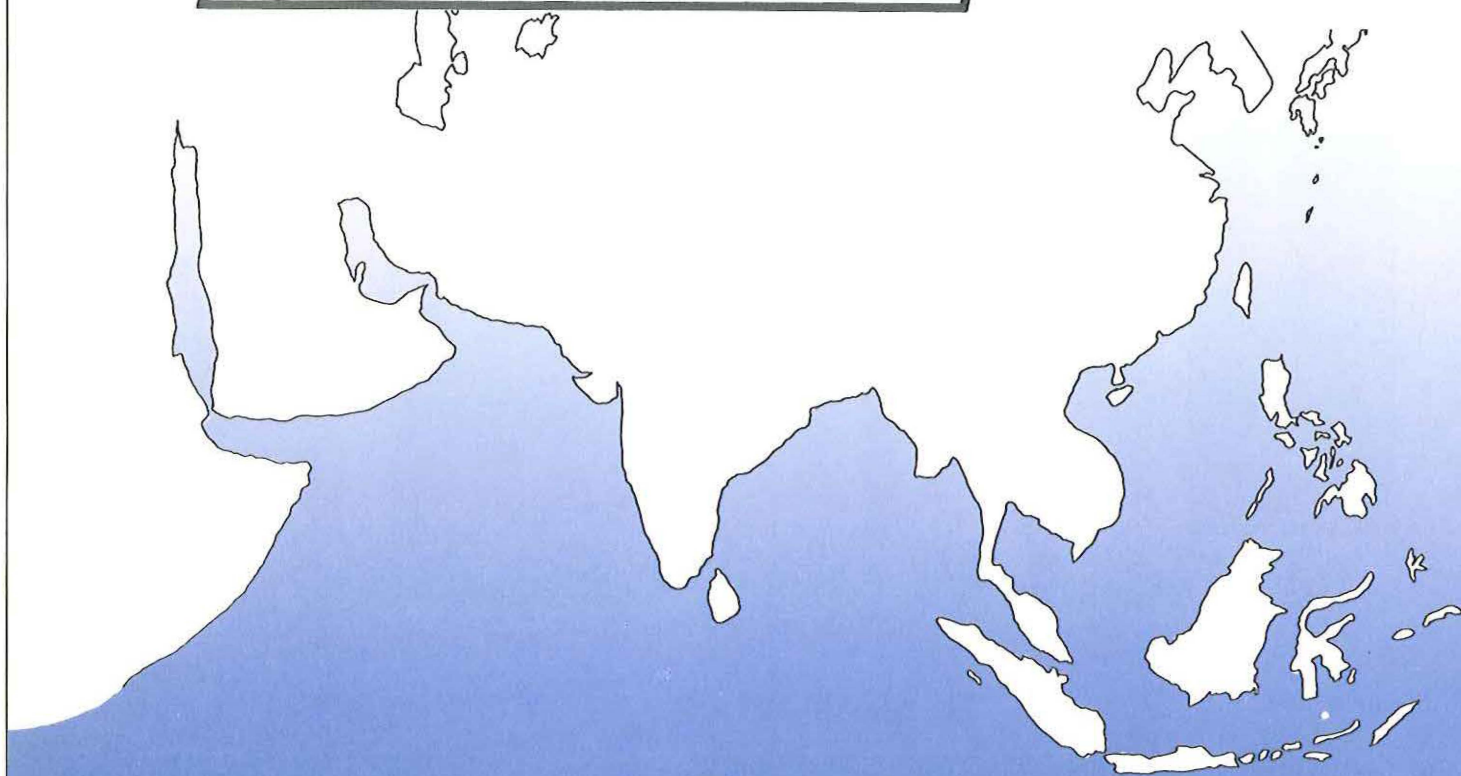


Asian Population & Development

アジア

人口と開発



1985・No. 13

財団法人 アジア人口・開発協会(APDA)発行

目次

巻頭言

—岸、福田両元首相に次ぎ三人目—

佐藤 隆代議士(本財団副理事長)が

「国連平和賞」を受賞

—人口問題の功績を高く評価—

1

○人口問題を緊急テーマに—パリのOBサミット—

佐藤 隆代議士の進言を採択……………

7

●佐藤 隆代議士の特別講演……………

8

○黒田俊夫氏(本財団理事)に吉林大学から名誉教授号……………

12

○本協会製作スライドが第三回日本産業教育……………

13

スライドコンクール優秀賞受賞……………

○佐藤 隆 AFPD議長「インド議員会議」で基調講演……………

14

—国連平和賞の受賞祝福をうける—

●ライブ・ガンジー首相、開会の辞……………

16

複眼的な「開発」にむけて

—スリランカの開発と現状—

20

足羽 与志子

APDA・日誌

27

勸アジア人口・開発協会発足並びに事業経過……………

29

巻頭言

日本人の女性の平均寿命が八十・一八歳と世界で初めて八十歳を超えた。男性も七十四・五四歳となり、文字通り「人生八十年時代」の到来となった。かつて八十歳まで生きる人は一割程度だったのに、現在では男性の四割以上、女性の六割以上が米寿を祝う。生活水準の向上や医療サービスの普及などが背景にある。

ところが「世界一の長寿」のニュースを素直に喜べない要素が多分にある。現在、六十五歳以上の高齢者は全人口の約一〇%を占めている。寝たきり老人、ぼけ老人はそれぞれ約六十万人とわれている。

金の現物まがい物商法で大阪地裁から破産宣告された豊田商事は高齢者を狙っていた。セールスマンのちよつとした親切な行動や言葉に心を和ませ、老後の生活のために貯えたトラの子を持つていかれた、という訴えが続出している。高齢化社会の「弱点」につけ込まれたわけで、こうした話には心が痛む。

二〇二〇年には高齢者は全人口の二二%に達すると予測されている。「長寿社会」への対応策が最近、相次いで示されており、国民生活審議会は退職年齢を六十五歳まで延長、年金支給年齢の六十五歳までの引き上げなどを提言。婦人問題企画推進会議は七十五歳以上では五人に三人が女性などの現状を踏まえ、老後を安心して暮らせる社会保障システムの充実などを訴えている。長い老後を健康に過ごせるよう個人、企業、政府が取り組む必要があることを改めて痛感する。

「国連平和賞」を受賞!!

デイビッド・J・エクスレイ国連広報センター所長から栄光に輝く「国連平和賞」を受賞する佐藤隆代議員（本財団副理事長、AFPPD議長）。右が燿子夫人。福田（左）、岸（中央）両元首相も心から祝福した。



岸信介元首相は「佐藤隆君の多年の努力が認められ、大変うれしい。私、そして福田赳夫君に次いで3人目の受賞だから、佐藤君は総理クラスだ」とお祝いの挨拶。

岸、福田両元首相に次ぎ三人目

人口問題の功績を高く評価

佐藤 隆代議士 (本財団副理事長) が



福田元首相（人口と開発・世界委員会会長）も熱をこめて世界的に大活躍する佐藤隆代議士の卓越した行動力を絶賛した。

古くからの人口問題の友人として花村仁八郎・経団連副会長（日本航空会長、本財団理事）の主唱で喜びの「乾杯」——。



受賞式は、四月十八日

国連は、本財団副理事長であり、人口と開発に関するアジア国議員フォーラム（AFPPD）議長の佐藤隆代議士に対し、同代議士の人口問題に対する数々の努力と功績、貢献を高く評価し、榮譽に輝やく「国連平和賞」を贈呈した。

晴れの受賞式は、四月十八日午後六時から東京・赤坂プリンスホテルのクリスタル・パレス・ルームで厳粛かつ盛大に行なわれ、ハビエル・ペレス・デクエヤル国連事務総長からの同賞表彰の親書と、ピースメダルがデイビッド・J・エクスレイ国連広報センター所長から佐藤隆代議士に贈られた。

人口問題での功績で同賞を受賞した日本人は、初代が岸信介元首相、二代目が福田赳夫元首相で、佐藤隆代議士は三人目である。ペレス・デクエヤル国連事務総長は、表彰親書の中で「佐藤氏が国連の人口活動の理想を深く理解し、その推進のためにたゆまぬ努力をされた」とたたえ、佐藤隆代議士の国際人口問題議員懇談会設立にあたっての努力や、数々の国際的な人口活動への貢献、さらに国連人口活動基金（UNFPA）の資金増額における尽力を挙げ、こうした同代議士の活動と努力が国連で大きな賞賛を得ることになった——と述べている。

光る数々の足跡——

佐藤隆代議士が国連人口問題に本格的に取組み始めたのは一九七三年。この年、岸信介元首相を団長とするアジア人口調査団に参加してインド、タイ、インドネシア、フィリピンを訪問。翌年、アメリカの人口危機委員会（PCC）の指名で、岸元首相の代理

として「食糧と人口に関する宣言」の国連式典に参加して宣言文に署名。議長会見で「人口・食糧問題は専門家の間だけではなく、政治レベルで大いにとりあげるべきだ」と述べ国際人口問題議員懇談会を日本国内に超党派の衆参両院議員百十九人で設立したことも報告、国際連帯の必要性を強調し続けてきた。

コロンボで、北京で——国際舞台で大活躍

一九七九年コロンボで開催された「人口と開発に関する列国国会議員会議」では、開催準備に大きなりーダーシップを発揮、副議長に選ばれ、同会議を成功に導いた。

さらに一九八一年、北京で開かれた「人口と開発に関する第一回アジア国会議員会議」では準備段階では運営委員長として、会議中は副議長として参加をめぐる中国、インドの調整に力を発揮したり、一九八四年メキシコ市で開かれた国連世界人口会議の開催を呼びかける「北京宣言」のとりまとめなどに活躍。

その後設立されに「人口と開発に関するアジア議員フォーラム」では初代の議長に就任、今日に至っている。

「国連平和賞」とは……

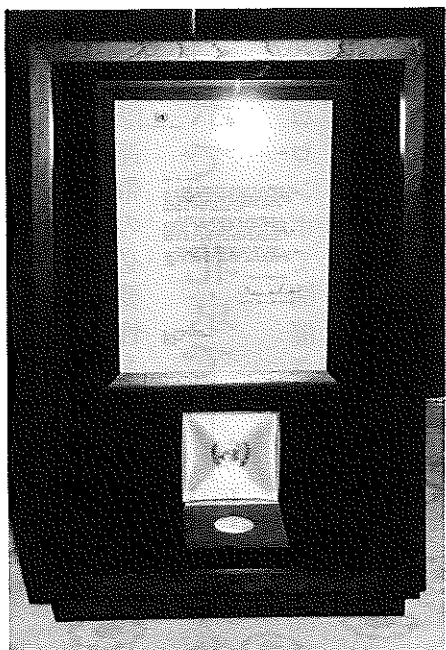
国連平和賞は、国際連合の活動に対し、特に顕著な貢献をした個人に対し、その功績をたたえて贈られるもので、これまで、前国連事務総長、クルト・ワルトハイム氏（一九八二年）、アラブ湾岸計画総裁兼ユニセフ特使のラル・ビン・アブドゥール・アジス・アルサウド王子（一九八二年）を含む各国の国連功労者数名が受賞している。

国際人口問題議員懇談会も 超党派で受賞祝賀会

国際人口問題議員懇談会（会長、福田赳夫元首相）では、佐藤隆・AFPFD議長の国連平和賞受賞を祝い、四月十九日午後六時から東京・平河町のマツヤ・サロンで受賞祝賀会を開き、超党派の衆・参両院議員をはじめ人口と開発関係学識経験者も多数出席して和やかに開かれた。

メンバーの住栄作元法相の司会で岸・福田両元首相が祝辞を述べ、柄谷道一参院議員（民社）が同懇談会からの記念品としてチーク材の表彰親書と平和メダルを納める豪華な格納ケースがプレゼントされた。

このパーティには国連広報センター所長のデイビッド・J・エクスレイ氏や、経団連副会長の花村仁八郎氏（日本航空会長）も駆けつけ挨拶、受賞を祝福した。



国際人口問題議員懇談会から贈られたケースに飾られた「国連平和賞」表彰の親書（上）と同メダル（下）

「人口問題」を緊急テーマに

パリのOBサミット

佐藤隆代議士の進言を採択

本財団副理事長の佐藤隆代議士（AFPFD議長、人口と開発に関する世界委員会常任理事）は、四月二十四日からパリで開かれた「元大統領・首相会議」（通称OBサミット）第三回総会に出席し、別項のような特別講演を行なった。

その中で、同代議士は、現在、OBサミットが当面の緊急課題としている「平和と軍縮」「世界経済の活性化」「開発協力の強化」の三大テーマに加えて、人類の生存と平和を脅かす「人口問題」を是非とりあげるよう進言した。

このアピールをうけた同サミットは、総会審議の結果、佐藤隆代議士の進言をとり入れ「人口問題」を主要議題の一つにすることを決定、OBサミットでも真剣に人口問題の対策を協議していくことになった。

引続き行なわれた執行委員会では、新たに人口問題に関するタスクフォースが組織されることになり、主幹に福田赳夫元首相が就任する運びとなり、人口問題で「国連平和賞」を受賞した日本の福田―佐藤コンビが人口問題の要を占めることになった。

佐藤隆代議士の特別講演

人口と開発に関する世界委員会・理事
人口と開発に関するアジア議員フォーラム・議長

佐藤 隆

議長はじめ、ご列席のメンバーの皆さま、私は先ず世界の平和と繁栄の為に大きな使命をにない、高い立場から活動を続けておられます皆さまに、心から敬意を表します。

そして、この「インターアクションカウンシル第3回総会」で、私に「人口に関連する問題」について発言の機会を与えられたことを大変光栄に思うと共に、深く感謝申しあげます。

さて、インターアクションカウンシルの最高目標である世界の平和と繁栄は人類永遠の願いであります。残念なことにこの地球上では人類が出現して以来絶えず、どこかの国で国家間の戦争が起きており、その深い根底に『人類に関する問題』、『資源を中心とした開発の問題』が常に存在し、かかわって参りました。

私は、『インターアクションが当面の緊急課題としている』、『平和と軍縮の推進』、『金利引き下げと対外累積債務の処理を中心とする世界経済の再活性化』、『開発協力の強化策』とともに、人類の生存と平和を脅かす『人口問題』を、インターアクションカウンシルでは是非とりあげ、並行論議して頂きたいと訴えるものであります。

なぜならば、適切な人口と資源の開発なくしては、真の世界平和も繁栄も求めることはできないからであります。

今、この地球上の環境は大きく変わりつつあります。目ざましい科学技術の進歩にも拘らず、もはや人々は人類が生きていくために必要な、食糧や資源が無限であることを信じなくなっています。

この一九八〇年代、人口は先進地域で減り、途上地域で爆発的な急増を続けております。一九八四年七月の統計では、世界の人口は四十七億六千三百万人で、年間八〇〇〇万人以上の増加を続け、今日現在では優に四十八億を超えております。十五年後の西暦二〇〇〇年には、六十一億三〇〇〇万人に達すると予測されており、しかも、年間人口増加八〇〇〇万人のうち、七〇〇〇万人は開発途上国で増えるものであり、世界人口の四分の三がこれらの地域に集中していることにも注目しなければなりません。

増加率に関して見るならば、一九六〇年代後半には、二・〇六%という驚くべき数字を示したものが、現在は関係者の努力により、一・七%にダウンしており、開発途上国でも二・四%から二・〇%に落ちていきます。しかし人口そのものは依然として増え続けており、当該国の賢明な政策による調整の強化が必要であります。現在、八十五の開発途上国で、公的援助による家族計画プログラムが実施されていますが、まだ二十七ヶ国が導入しておらず、その半数がアフリカ諸国でありそこでは人口増加が最も高く、所得は最も低くなっています。

その一方で、先進国では人口の高齢化が進んでおります。国連の発表によりますと、一九八五年現在の人口中央値は二十三才で、二〇二五年には三十一才になります。

今日、先進国では極端な高齢化が続き、日本でも非常に深刻な課題になってきております。シンガポール、香港、韓国、ブラジル、メキシコ等の出生率低下を実現した新興工業国や、一人っこ

政策をとってきた中国でも、高齢化問題に対する関心が非常に高まっています。

この高齢化問題は、社会問題に加え、医療、年金、雇用、等々で、早急な対策を迫られております。現在、人口抑制に力を入れている途上国にも、いずれ高齢化という人口構造上の難問が待ち構えているのであります。

また一部の先進国では、人口増加の静止、或いはマイナス減少が起きています。これは、死亡率が出生率を上回ることによる人口の絶対的減少であり、これも見逃すことのできない人口問題の一つであります。

このように、一方で飢餓と貧困によるおののき、一方で高齢化社会の不安、まさに『人口問題』は、一つの問題解決が、新たな問題を生むという厳しい宿命をもっているのであります。

そして、さらに人口問題は、その国の文化、思想、宗教、政治、経済等を複雑かつ有機的に結合しつつ、さながら「迷路」の様相を呈しております。

この「迷路」から脱出するためにはどうしたらよいか。

先ずは、有効な教育と家族計画の徹底が必要です。その原点は、人命尊重、人権尊重、そして人類愛そのものであります。

これに、資源を求め、新しい技術開発の英知を組み合わせれば、必ずや道は開けるものと確信いたしております。

そして何よりも、各国政府、立法府、UNFPA等国連機関、民間レベルでのIPPF等の、積極的なイニシアチブによる、各国の主権を尊重した、相互協力、相互依存が重要なキーポイントになると思います。

そして、知恵を持つ者は知恵を、豊かな財を持つ者は財を、これを必要とする国々に提供し、この友情を受ける国は感謝と自ら

の努力によって問題解決のために真剣に汗を流すべきだと考えます。

さて、議員グループの世界組織である「人口と開発に関する世界委員会」・グローバルコミッティー会長の福田元首相は、インターアクションカウンシルのコンビーナーとして、その設立委員会で世界の人口問題に焦点をあて、「人口と開発の課題が、この激動とも言うべき変化の時代への、対応の主軸として、取り上げられなければならない。」と、提唱され、シュミット元首相をはじめ皆様が高評価されました。

UNDPの事務総長・モース氏も率先理解をされ、助言を重ねてこられました。

世界の人口問題は多様化し、都市化、高齢化等をみても歴史上かつてなかった程に複雑化、深刻化しております。私は人口問題の解決は、世界平和と繁栄の原点であり、国際政治に課せられた緊急課題であるとの認識をいよいよ深くしております。

かかる問題の対策としては、人口と開発、各々の特殊性に応じた「最もバランスのとれた人口と開発の総合政策の確立」それ以外に方法がないと確信いたします。

希望に満ちた二十一世紀を築くため、このインターアクションカウンシルで具体的に「人口委員会」を設置され、カウンシルの目標を効果的に前進されるよう、議長はじめメンバーの皆さまの、一層の御理解をお願い申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。



黒田俊夫(本財団理事)氏に 吉林大学から 名誉教授号

本財団理事、黒田俊夫氏(日大人口研名誉所長)に対し、中国の人口研究の中心的アカデミーの一つである吉林大学からこのほど「名誉教授」の称号が贈られた。

黒田氏は去る五十五年から本格的に中国の人口問題に取り組み、すでに訪中は十回を数え、昨年夏には三週間にわたって同大学で人口学の講義をしたり、同大学人口研究所の若手研究者を留学生として受け入れ、指導したりしている。

昨年に引き続き、本財団事業の中国の人口・家族計画調査のため七月から吉林省入りする。

黒田氏は「自分が喜んでやっている仕事なのに、称号をいただく感無量です。とくに吉林省の人々は身近かな親類のような気がしています」と、喜びを語っている。

なお、黒田氏は、去る五十七年、東亜大学から「名誉経済博士」の称号もうけている。

本協会製作スライドが 第三回日本産業教育スライド コンクール優秀賞受賞

本協会が企画製作したスライド「日本の農業、農村開発と人口——その軌跡——」（カラー・二〇分）は、第三回日本産業教育スライドコンクール（主催日本スライド連合会）広報部門の優秀賞を受賞した。

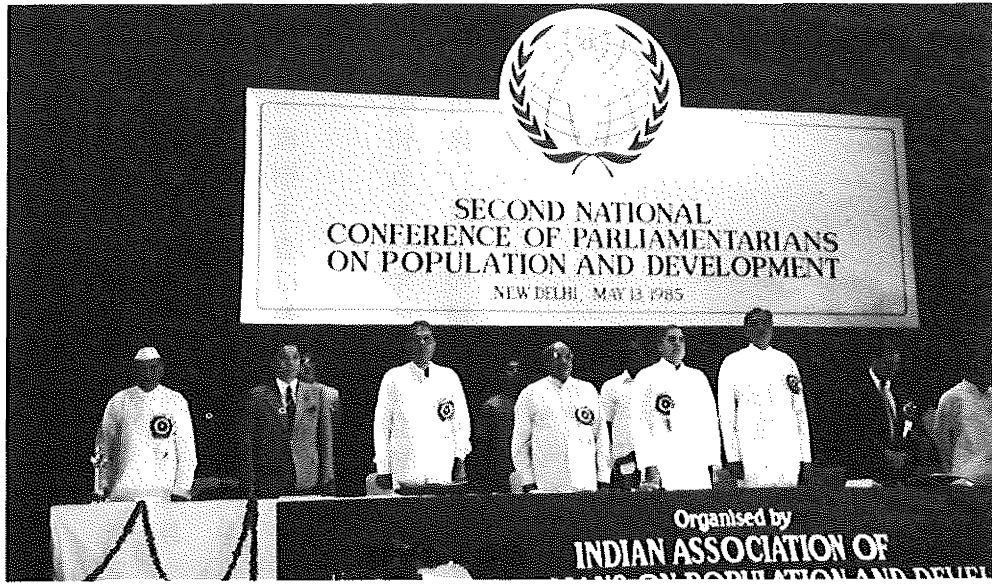
同スライドは、戦後の日本の農村における変遷を、農地改革、農業基本法、機械化による省力化、改良普及活動、生活改善運動が、農村の人々に与えた影響、特に大家族から核家族へ移行する課程について描いたもので、同コンクールに多数応募した中から、日本大学芸術学部教授登川直樹主査ほかの審査員による審査の結果、今回の受賞となった。

なお、同スライドは、昭和五十九年度本協会補助事業として（財）日本船舶振興会（会長笹川良一氏）の補助により製作されたものである。

『インド議員会議』で基調講演

佐藤 隆 AFPPD 議長

＝国連平和賞の受賞祝福うける＝



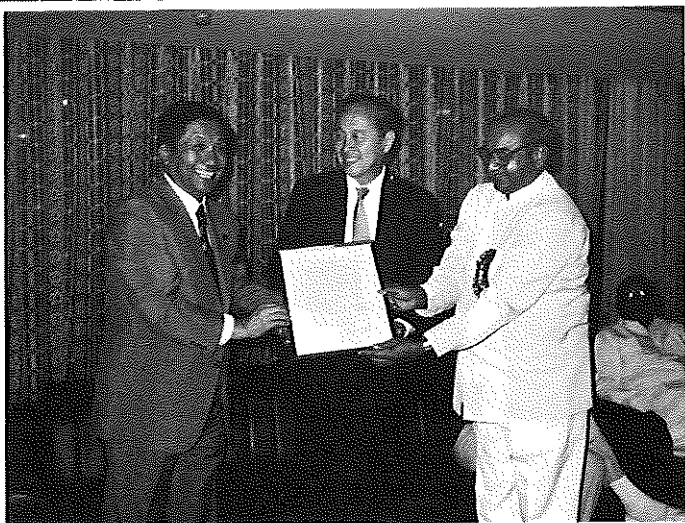
開会冒頭、勢ぞろいした来賓。右からサラス国連人口活動基金事務局長、1人おいてラジブ・ガンジー首相、ミッタール・インド議員連盟会長、1人おいて佐藤隆 AFPPD 議長。

五月十三日、インド国・ニューデリーの国際会議場で開かれた「人口と開発に関する第二回インド議員会議」に、本財団副理事長で、「人口と開発に関するアジア議員フォーラム」議長の佐藤隆代議士が招かれ、特別ゲストとして基調講演を行った。インド国全土から参加した四百人余の国会、州議会議員、学者、研究者、関係機関、団体役員、さらに、来賓席のラジブ・ガンジー首相、サラス国連人口活動基金事務局長らを前に参加者に深い感銘を与えた。

また、首都ニューデリーにまで広がった「宗教暴動」の最中、同本会議に冒頭から出席したラジブ・ガンジー首相は、終了までの一時間半も同席するという熱の入れよう。インドにおける人口の深刻さと首相の関心度の高さを実に物語っていたが、二十十分余にわたる首相の原稿なしによる演説（要旨別紙）は、首相就任後、公式の場における人口政策に対する初の「見解」といわれ、その内容は、きわめて注目されるものであった。

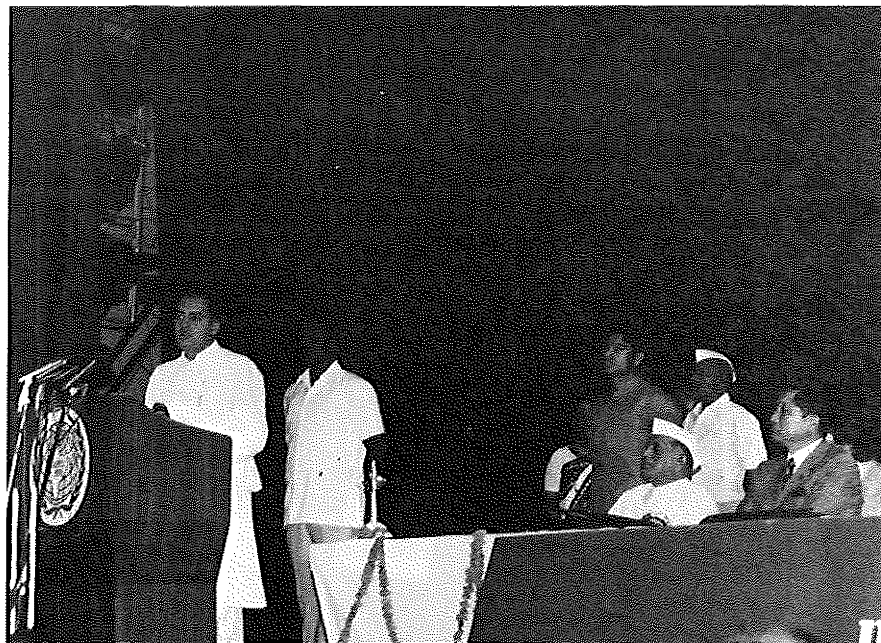
人口と開発政策で国連平和賞を受賞した佐藤隆副理事長は、インドでも大歓迎された。会議終了後、インド議員連盟（会長・ミッタール下院議員）主催による国連平和賞受賞祝賀パーティーが開かれ、祝福されたが、「私の受賞は同胞である皆さんのものである」の佐藤隆氏の謝辞に大きな拍手が起った。

基調講演をする佐藤隆 A F P P D
議長。



国連平和賞祝賀パーティーの席上、
サラス事務局長立ち合いのもと、
ミッタール会長から「祝賀状」が
佐藤隆代議士に手渡された。

ラジブ・ガンジー首相 開会の辞



主催者を代表して人口政策に対する所信
を述べるラジブ・ガンジー首相。

四年前に、この同じホールで今回と同様な会議が、今は亡きインディラ・ガンジー首相により開会宣言されました。

インディラ・ガンジー首相は、我が国の人口抑制プログラムの基礎を築き、そしてインドの人口増加を抑えた功績に対して、第一回国連人口賞の栄誉を与えられました。

人口問題はインドのみならず世界全体にとって極めて厳しく且つ重要な問題です。特にインドに於いては、高率の人口増加が国の経済成長に影響を及ぼしているのです。特にその重要性が増していると言えます。

インドでは毎年オーストラリアの全人口とほぼ同数が新たに生

まれています。毎分四十四人のベビーが生まれているのです。これこそ我が国が直面する挑戦であります。そうした中でも我が国のプログラムはかなりの成功を納めています。長期間かかって出生率もかなり下がり、二%以下までになりました。

今後の目標としては、今世紀末に向けて出生率をさらに減少し、純再生産率「一」を達成し、この問題を十分に支配下におさめてしまいたいと考えます。

幸いなことに、我々は人口の増加よりも早い率でGNPを増加させることができるようになりました。こうして初めて、我々は直面する真のチャレンジよりも一歩先んずることができたのです。そしてこれを一切強制的手段を用いずに、民主的な環境の中で自主的に達成できたことは、インドの大きな誇りであります。

家族計画・人口抑制を家族計画の単なる無味乾燥な過程としてみてはならず我々の社会の発展のあらゆる面と結びつけてとらえなければなりません。人口抑制（管理）の問題は国により様々に異っています。我が国とは逆の問題を抱える国も多数あります。これは単に家族計画の問題ではなく、社会計画の問題としてみるべきであり国の発展、人々の生活の向上に伴って人口も対応していかなければなりません。今日我々は、この問題にどうしたら全ての側面をとり入れることができるか検討しています。直接的家族計画に大きなステップを踏み出しましたが、ある程度まで成功を納めています。しかし、真の成功は、教育、社会改革の場、そして婦人が社会で平等の権利を持ちはじめた時にはじめて得られるのです。そして我々は今こそ、そこに力を傾注しなければなりません。教育についても大きなプログラムを実施しています。教育こそが、あらゆる家族計画の基礎にならなければなりません。しかしこれは長期的な計画で長い時間がかかります。そこで我々

は他の方法の利用も検討しなければなりません。例えば、民間伝承ならびに近代的な媒体方法を使って人々にメッセージを伝えることです。そのためにテレビネットワークを拡充し、その結果現在では国民の大半にサービスを提供することができるようになりました。テレビシステムは八十のトランスミッターを備えて、極めて広範囲の放送網を持つようになりましたが、今後はこのテレビが家族計画教育の基盤となる必要があります。既にこの面での努力は始まっています。ドアダーシャン (Doordarshan) が一、二の番組を制作し、好評を博しています。今後ともこの傾向が続き、その効果が人口統計数字と増加率に反映されることを願っています。

さらに、上は大学から下は小学校まで教育のあらゆるレベルで婦人が正しい教育を受けられるように努力しなければなりません。他に成人教育も重視して促進していこうと考えています。

どんな家族計画にとっても、婦人の福祉が極めて重要です。インド社会に於いて、ぜひ婦人の地位を向上しなければなりません。そのために、今後ともこの分野での措置を強化・拡充して、近い将来にははっきりした成果を挙げたいと考えています。

妊娠中、出産時、出産後の健康管理も同じように重要であり、農村部にも普及されなくてはなりません。しかしながら現実には都市部にばかり健康管理サービスが集中されておりなかなか村落部にまで人々を派遣できずにいます。これは深刻な問題で、ぜひ何とか取り組むことが必要です。

乳児死亡率は大幅に低落し、これは人口の平均年齢にもあらわれています。もうひとつ免疫が重要な要素となってきました。この分野でユニオン・ヘルス(健康)省がインデラ・ガンジーのイミュナイゼーション(免疫)プログラムをとりあげ、一九九十年

までに全ての児童に適用させようと働いていることは、たいへん嬉しいことです。今後これが人口抑制プログラムの中で再び大きなステップとなるでしょう。

本当の意味での「違い」は、農村部で経済的に大変化が訪れた時に出てくるのですが、最近この部分でも経済活動の活発化、生活水準の向上、教育の向上が早い速度で進展していることは、たいへんに慶ばしいことです。特に我々はこのプログラムが女性の助けとなってくれるように願っており、統計にその直接効果が表われることを期待しています。このプログラムは全世界にとって大きなチャレンジであります。発展途上国のGNPが伸び悩んでいる現在、平和かつ先進的な世界創りを目指す我々にとって大きな社会的緊張が感ぜられます。我々は、世界中どこでも人口がコントロールされ、均衡を保っているように努力する責任があります。それこそが今日立法府議員の直面する挑戦なのです。

今日ここにインドの全地域から広範囲の人々を代表する議員が一堂に会されたことを嬉しく思っています。この問題は、社会問題であると同時に政治的問題でもあります。我々は政治が人口問題で意見を統一するようになければなりません。即ち人口を減少させることです。これを政治的闘いに巻き込んだり、偏狭的な次元におとしめたりしてはなりません。これは国を挙げての、そして世界のチャレンジなのです。我々すべてが抱えているこの問題を解決してくれることを確信しています。

複眼的な「開発」にむけて

スリランカの開発と現状

足羽与志子

（一橋大学大学院・社会人類学）

スリランカは他のアジアの発展途上にある国々と較べてやや異なつた状況にあるといわれている。一般的な「開発」あるいは、「発展」という視点からみれば成功した、成功しつつある例とみなしてもよいであろう。

まず人口問題に関しては、北海道よりやや小さいこの島には約一四八五万人が住む（八十一年三月）。人口増加率は十八世紀末には年平均約〇・九%であつたものが、一九四八年の独立以降約八年間ほどは年平均二・八%と上昇する。しかし、その後の家族計画運動などの成果が徐々に表れはじめて一九五三―一九六三年には二・七%、一九六三―一九七一年には、二・三%と減少の傾向にある。途上国でこのように早くも五十年代から人口増加率が減少の方向にむいているのは数少ない。また首都コロンボが一七〇万に近い人口を抱えるのははじめとして主要都市数ヶ所に人口が集中しているのは否めないが、一方早くから東部ドライゾーンへの開拓移住がおこなわれていて、とりわけスリランカ最大の川マハウエリ川灌漑計画の進行にもなつて農村の加剩人口のドライゾーンへの移住がめだつ。従つて人口分布にも他のアジアの国々のような都市の超過密化や農村の激しい過疎化などの問題はそれほど心配がないように思われる。

また社会福祉においても成果をあげている。教育は六才で就学してから大学まで無料で、教育を受ける機会は均等に開かれてい

る。現在では初等の九年間の児童の就学率はかなり高い。また全国共通テストによって大学入学がきまり毎年四千人ほどの学生が大学へ進学する。全島にわたって人々の教育熱は近年とみに高まっている。

このほか医療費を政府が負担する健康サーブिसや一定所得額以下の人々への米などの基本食料品の無料支給などが独立以前の一九四〇年代からもうはじまっていて、現在でも村の貧しい人々の大きな助けとなっている。

一方こうした成果が多党政治体制のもとでおこなわれたのも、スリランカの特徴である。現政権は資本主義よりのU・N・P・(United National Party)であるが、以前は長年、S・L・F・P・(Sri Lanka National Party)が強固な社会主義路線をとっており、福祉の充実や人口抑制もこの政権下で特に重点をおかれた政策である。このほかのいくつかの小党とともに政党議会政治を行うスリランカはアジアのなかでも最も古い民主主義の国の一つである。

ところがいまこうした表面的な成功の下にはこのようなことでは解決のつかない、非常に難しい問題が隠されているように思える。それは私がスリランカの農村に文化人類学のフィールドワークで一年間滞在していた期間に特に印象深かったことであるし、その後の数度の滞在でもその思いは深まっている。

それは、農村の人々のあいだに自分達の手で開発を推し進めるという意欲や気力が薄く、「開発計画」というかたちで上部の人たちが考える理想にむけてつくったものをただそのまま農民が受けとっていることだ。スリランカがアジアでも古い民主主義の国であり、その福祉政策や人口問題がしかるべき成果をあげているにしても、これらが真に人々の要求を満たし、開発の最も基本的な出発点であると同時に重要な最終目標でもある「個人」の啓発

をうながし、人々の価値観や文化、伝統にあった、しかも人々の自発的な意志による展開であるかは疑問である。この点においてはスリランカも他のアジアの国々とかわりないだけではなくスリランカの特異な事情からむしろ他の国々以上に深刻な問題となっているようだ。

たとえば私が調査していたシンハラ人の村でこんな話があった。スリランカ南部のその村は海岸から続く低地水田地帯から徐々に丘陵部に移るそのちょうど中間にあり、水田とゴムなどが植えられていたなだらかな丘とが入り組んだ地形をしていた。人口二五〇〇人ほどのほとんどが農民である。この村の北東部の高台に約十五アールほど国有地がありこれまで誰れも住んでいず、未使用の荒地であったのが、一〇年ほど前に国から突然入植者の募集があった。非常に安い値で、しかも無利子の分割払いで土地が手にはいる好条件に加え家をつくるレンガや農具、またそこへ植えるゴムの苗木を無料で与えるほかに月に少しだが援助金が支給されるといったいへんに恵まれた条件のために、遠くの村々からも応募が殺到した。結局、面接や抽せんや賄賂で一〇数家族の入植が認められた。

ところが現在残っているのはわずかに四家族でしかも戸主はみな町へ出稼ぎに行っていて、家のまわりのわずかな畑を残った妻たちが耕しているにすぎない。村を歩いていてもその地区にはいると枯れそうな若木がまばらにはえているだけで、荒れた土地がめだちさびれた感じがした。家々を訪れて話を聞くにつれてその理由がわかってきた。入植者によるとまず決定的に土地がやせていて、そのうえ水が充分でない。ゴムには不向きな地質らしいがその後の政府からの作付指導もない。井戸も掘ってはくれない。政府は土地は安くくれたがそのあと何もしてくれないという。加

えて、寄せ集めの入植者たちのあいだにはリーダーもうまれず、また、自分たちがこれまで行っていた代々の寺院は遠すぎておまわりに行けないし、またこの新しい村の寺へは行きづらく、心やすく相談する僧侶もいないという精神的な不安も強くあったようだ。結局、ほとんどの家がまた別の新しい土地へ散って行き、行くあてのないここに残った人々も無気力な疲れた表情を浮かべるだけであった。入植時に子供は二人までと制限されたということ、どの家も母と二人の子しかいないのが印象的だった。しかし一方では役人は入植者が少しも自分達で努力しようとはせず、なまけものであることのみを非難する。こうした例はこの村だけではなく、他の多くの開拓地や、あるいは伝統的な村のなかでさえみられた。

ここで示されるのは、「勤労意欲のない農民」と「一方的な行政体制」という一般的にすぐ想像されるような対立図式だけでは理解できないスリランカの深い歴史的背景がある。スリランカは十六世紀からポルトガル、オランダ、イギリスと三世紀半にわたって植民地支配を受けてきたが、この長い植民地支配のあいだにスリランカ社会は二つの全く異なった層を持つようになり、最後の英国統治時代に決定的になった。それは植民地政府の行政や通商において政府と密接な関係のなかで生まれたエリート層と人口の八割以上を占める農民からなる常に被支配側であった大衆層である。この層は社会的だけでなく文化的にも全く異なる。エリート層は西欧風の価値観をもっていて、都会に住み英語だけを話すといったふうにあらゆるしかたで白人の様式をまねて自分達の文化にしていったのに対して、大衆層は支配者が誰れであれそれに従うのみでシンハラ語を話し、農村の伝統的な生活を変えることなく続けてきた。一九四八年の独立も、大衆層にとってはこのエ

リート層がこれまでの英国人の役割をかわって担ったにすぎず、その後シンハラ伝統主義や仏教復興運動が国全体を包んだときも、このエリート層が指導し大衆が地方で受身となる図式はかわらず、かえってエリートが統治にまわるといふことで国家的な正当性をおびたために植民地時代よりもいつそうはつきりと分離が進んだ。この二つの層の決定的な違いが「制度」ではなく長い間に培われてきた「文化」にあるところに変えようにも簡単にかえられないむずかしさがある。

従ってスリランカの開発計画や福祉政策は常にエリート層が追う理想にむけて、エリート層が考える「村の人々」に一方的に手渡されているといえよう。そして大衆層である農民は何世紀にもわたって「受けとる」ことが慣習化されいて、そこには自らの生活を自らの価値観に従って充実させようとする自発的な意欲はうしなってしまう、ほとんどうかがうことができない。この体質は「開発」以前の問題である。

こうした状況のなかで現在着実な成果をあげているサルボダヤ運動という仏教思想に基づいた人々の自立のためのボランティアによる非政治的な社会運動がある。サルボダヤとは仏陀の教えのひとつである「すべてのものの覚醒」を意味する。一九五八年から始まったこの運動は現在二、三〇〇万人の参加者を持ち、スリランカ全土に村づくりの訓練所やサルボダヤ協議会が開設されている。まず何よりもこの運動は人々の覚醒と自立をうながし、要請があると訓練員を村に送り、人々の手によるワーク・キャンプ、労働奉仕を通じて村落レベルの組織造りを図る。そして保健、教育、農業、地域産業など独自のプログラムによる開発をめざしていて個人の覚醒がしいては共同体、国家、世界の覚醒に広がることを理想とする。注目したいことは、この運動の精神的支柱が古

くから人々の生活のすみずみに侵透しているテーラワーダ仏教にあることだ。ダルマ（仏法）がサルボダヤ運動を正当化し運動の基盤となる価値体系を与え、またいっぽうでは人々の伝統的な宗教へのエネルギーを運動が引きだして村の人々の経済的あるいは精神的自立を確立させる。そこではたす仏教僧の役割もとても重要で大きなものだ。この運動がいわゆる他の途上国にみられるような極端な土着文化主義、反エリート主義、反体制とは、一線を画しているのは非暴力とおだやかな平等主義の仏教精神の伝統を守っているからであろう。同じ仏教徒であるエリート層からも多くの賛同を得ていて、エリート層と大衆層のみぞを仏教精神によるこのサルボダヤ運動が強い大衆の自立へのエネルギーをもってうめることも期待できる。

しかし、スリランカには階層問題に加えて、大きな民族・宗教問題がある。スリランカは多数民族である仏教徒シンハラ人のほかにヒンズー教タミル人やイスラム教ムーア人、またキリスト教徒などからなる多民族、多宗教、多言語の複合国家であり、最近、とくに激しさを増しているシンハラ人とタミール人の対立問題などで常に緊張をはらんでいる。個人の覚醒と同時に国家の覚醒をもめざすサルボダヤ運動もこの問題をさけてとおることはできず、仏教の伝統精神に結びつきながらなおかつ他の宗教、他の民族をめぐめさせるという非常に難しい状況に直面している。

「発展」「開発」ということが人々の幸福をより増してゆくことであるなら、その幸福とは何かが最も根本的な問題となってくる。宗教と生活が密接に結びついたアジア諸国の開発が西欧的な「開発」の概念とは異質なものであることは明らかである。また「発展」がもたらした物質的充足のはてに精神的な飢えに気づきはじめて西欧諸国ににわかに宗教への関心が高まっていることを

考えれば、開発そのものに大きな疑問を投げかけざるをえない。しかし、そのさいに、単に西欧的価値観に対して、アジアの国々の伝統文化や精神世界を強調するという単純な方法だけではいっこうに解決にはならない。スリランカの場合のように配慮を欠いた開発計画は長い間の植民地行政の弊害である。政府の一方的な行政の受け身の農民という構図の余地があるだけにかえって個人の意欲を喪わせる原因にもなり、また逆に精神的伝統を強調して自立をめざす運動は、複合国家内の異なる民族間の対立にはばまれる。加えて増々国際的に活躍の場を広めるエリート層といっそう村レベルの生活にしがみつくと農民層の格差は広がる一方である。統計に表れる結果とは別の次元の問題をながめるためには「開発」にむけた複眼的な視座が、強く望まれなくてはならない。

3月29日

人口と開発研究会
中国、タイ調査報告及び昭和六〇年度調査について懇談。黒田俊夫理事、小林和正理事他本協会学術委員。

4月8日

昭和六〇年度日本政府委託調査事業に関し、主査間協議を開催。黒田俊夫理事、川野重任理事、佐藤隆副理事長、国連平和賞を受賞。於赤坂プリンスホテル。

5月11日

「第二回人口と開発に関するインド議員会議」（於ニューデリー）に佐藤隆副理事長（同会議ゲストスピーカー）、船津準二参加が出席、タイでは、クリアンサク前大統領と懇談。

（14日

5月15日

本協会理事会開催。於赤坂プリンスホテル。

5月16日

本協会製作スライド「日本の農業、農村開発と人口―その軌跡―」が日本産業教育スライドコンクール、優秀賞を受賞。

アルビハレ事務局次長来所。

5月21日
6月3日

「留学生の学習と生活条件に関する研究―人的能力開発に即して」研究会開催。主査川野重任理事。

6月6日

安藤博文UNFPA総務財務部長来所。

6月15日

「留学生の学習と生活条件に関する研究―人的能力開発に即して」研究会開催。主査川野重任理事。

6月18日
6月19日

国際人口問題議員懇談会総会（於 憲政記念館）
ウィラクーン I P P F 事務局長、アルビハレ同
事務局次長、本協会職員と懇談。

財団法人アジア人口・開発協会発足並びに事業経過

<p>一九七三・十 (十・十三、二十八)</p>	<p>アジア人口事情視察団派遣（インド、タイ、インドネシア、フィリピン）</p> <p>○国會議員</p> <p>岸 信介（団長）、田中龍夫、八田貞義、佐藤 隆、山崎竜男、加藤シズエ、阿部昭吾</p> <p>○他</p> <p>花村仁八郎、W・ドレーパー、J・タイディングス 官庁、マスコミ関係等</p>
<p>一九七四・四・一</p>	<p>「国際人口問題議員懇談会」設立（会長・岸 信介） 衆・参超党派議員一一九名で発足。</p> <p>☆世界で初の試みである。</p>
<p>一九七四・四・二十五</p>	<p>「食糧と人口に関する宣言」：国連式典 (於：国連本部)</p> <p>宣言書署名・佐藤 隆</p> <p>○八月及び十一月の世界人口・食糧会議に先立ち、各国政府に現実的且つ果敢な諸政策を採るよう要請する五項目から成る。</p> <p>○人口・食糧問題解決の為、国連にリーダーシップをとることを要請した宣言文。</p>

<p>一九七四・八 (八・十九、三十)</p>	<p>第三回 国際人口会議 (於…ブカレスト) 総勢 四五〇〇人 齊藤邦吉(元厚生大臣)、八田貞義、佐藤 隆、 堂森芳夫、柏原ヤス、中沢伊登子 他</p>
<p>一九七四・十</p>	<p>I P U 列国議会同盟会議 (於…東京) 参加国…六十五カ国 佐藤 隆代議士 「食糧と人口問題」ライス・バンク構想を 提唱。</p>
<p>一九七七・九 (九・三、十八)</p>	<p>中南米家族計画視察団(メキシコ、コロンビア、ブラ ジル、アメリカ、カナダ) 国会議員(八名) 岸 信介(団長)、佐藤 隆、住 栄作、 安孫子藤吉、和田耕作、阿部昭吾、福岡義登、 吉寺 宏、他 顧問団(十六名) 大来佐武郎、花村仁八郎 他 U N F P A 二名、事務局五名 ○先進国にも、途上国にも、人口問題議員グループ を結成させるべく、各国立法府議員に呼びかけた。</p>

<p>一九七九・三</p>	<p>一九七八・十 (十・十六、十七)</p>	<p>一九七八・三 (三・二十八、三十)</p>	<p>一九七七・十二 (十二・五、十一)</p>
<p>IPOP国際会議準備委員会(第三回) (於…メキシコ) 日本側参加者…佐藤 隆 他 ○「宣言」の草案作成、○会議規定、○日程 etc</p>	<p>IPOP国際会議準備委員会(第二回) (於…チュニジア) 日本側参加者…佐藤 隆 他 ○開催国、○主催機関、○議題 etc、について</p>	<p>人口と開発列国国會議員(IPOP)東京会議 — 第一回 国際会議準備会議 — 参加国…米、英、加、西独、インド、スリランカ、 メキシコ、ブラジル、コロンビア(九カ国 四十名)、日本(十名) ○運営委員メンバー国、○参加国、○議事日程、 ○予算</p>	<p>人口と開発先進国会議(ロンドン、ボン、ベルリン) 参加国…日、米、英、加、西独(五カ国…十六名) 日本側…佐藤 隆、和田耕作、土井たか子 ○一九七七年九月の中南米視察に引続き各国立法府 議員への呼びかけ。 ○国際議員会議の開催について討議。</p>

<p>一九七九・八 (八・二十六) 九・二)</p>	<p>IPOP 国際会議 (於…スリランカ) 参加国…六十四カ国 他、国連各機関、IPPF等 総勢 五五〇名 日本側…岸 信介、佐藤 隆、石本 茂、中村啓一、 柏原ヤス ☆人口問題議員グループ、結成国二十五カ国を超 えるに到ったので、UNFPAに働きかけ、コ ロンボで開催。 一、"コロンボ宣言"採択 この宣言により、一九八一年、アフリカ、 ヨーロッパ、アジアの各大陸での人口会議 が開かれた。 一九八一年 七月 ケニヤのナイロビに 於て 十月 中国の北京に於て 十二月 仏、ストラスブール に於て 一九八二年十二月 ブラジルのリオデジ ヤネイロに於て (予定)</p>
<p>一九八〇・九 (九・十)十三)</p>	<p>資源、人口、開発に関するアセアン国会議員代表者会 議 (於…クアラルンプール) 参加国…シンガポール、マレーシア、タイ、フィリ ピン、インドネシア(五カ国) 日本側…佐藤 隆、住 栄作、井上晋方 (日本はオブザーバーとして参加をし、北京会議 開催を提案。合意を取付けた。)</p>

<p>一九八〇・十一</p>	<p>人口と開発に関するアジア国会議員会議 日・中打合せ （於…北 京）</p> <p>佐藤 隆、井上晋方</p> <p>○開催地北京への正式な可能性打診</p>
<p>一九八一・三・二十三</p>	<p>人口と開発に関するアジア国会議員会議 第一回運営委員会 （於…東 京）</p> <p>参加国…日本、中国、インド、スリランカ、マレーシア</p> <p>○政治、イデオロギーの問題の除外について</p> <p>佐藤 隆代議士——国連開発計画（UNDP）とアドバイザー契約締結</p> <p>○一九七九年八月の「コロンボ宣言」に基づく、地域IPOP会議の開催とそのフォローアップを任務とする。</p>
<p>一九八一・六 （六・十九～二十）</p>	<p>人口と開発に関するアジア国会議員会議 第二回運営委員会 （於…北 京）</p> <p>参加国…日本、中国、インド、スリランカ 他 UNFPA</p> <p>日本側…佐藤 隆、住 栄作、土井たか子 他五名</p>

一九八一・十
(十七・二十七～三十)

「人口と開発に関するアジア国会議員会議」

期 日…一九八一年十月二十七日～三十日
開催地…中国北京市
会 場…人民大会堂

(1) 日本側出席者…

- | | | | |
|-----|--------|---------|-------|
| 1、 | 团长 | 福田 赳夫 | (衆・自) |
| 2、 | 佐藤 隆 | (" | ") |
| 3、 | 住 栄作 | (" | ") |
| 4、 | 関谷 勝嗣 | (" | ") |
| 5、 | 桜井 新 | (" | ") |
| 6、 | 栗山 明 | (" | ") |
| 7、 | 石本 茂 | (参・自) | |
| 8、 | 田代 由紀男 | (" | ") |
| 9、 | 井上 晋方 | (衆・社) | |
| 10、 | 土井 たか子 | (" | ") |
| 11、 | 福岡 義登 | (" | ") |
| 12、 | 川本 敏美 | (" | ") |
| 13、 | 片山 甚市 | (参・社) | |
| 14、 | 有 島 重武 | (衆・公) | |
| 15、 | 柏原 ヤス | (参・公) | |
| 16、 | 矢追 秀彦 | (" | ") |
| 17、 | 和田 耕作 | (衆・民社) | |
| 18、 | 柄谷 道一 | (参・民社) | |
| 19、 | 山口 敏夫 | (衆・新自) | |
| 20、 | 阿部 昭吾 | (衆・社民連) | |

秘書数名

同時通訳者 三名

事務局 三名

	一九八一・十・三十
<p>(2) 議長 長 廖承志 (中国全人代副委員長)</p> <p>副議長 長 佐藤隆 他五名</p> <p>司 会 陳慕華 (中国副総理)</p> <p>起草委員 住 栄作 他五名</p> <p>(3) 主なる日程</p> <p>① 第一日目 (十月二十七日)</p> <p>○ 福田元首相の特別講演</p> <p>○ 福田元首相、国連平和賞受賞</p> <p>② 第二日目 (十月二十八日)</p> <p>○ 黒田俊夫博士の</p> <p>「日本の人口変動の傾向と展望」講演</p> <p>③ 第三日目 (十月二十九日)</p> <p>○ 住代議士によるカントリー・レポート発表</p> <p>④ 最終日 (十月三十日)</p> <p>○ 北京宣言採択</p>	<p>人口と開発に関するアジア国会議員会議</p> <p>第三回運営委員会 (北京会議最終日同地にて)</p>

一九八二・二・十

財団法人アジア人口・開発協会 創立

☆北京会議時の第三回運営委員会に於て、発議された「アジア議員フォーラム」の活動母体として創された。

理事長・田中 龍夫（衆議院議員自民党総務会長）

副理事長・佐藤 隆（自民党副幹事長）

理事・住 栄作（自民党総務局長）

〃 〃 花村仁八郎（経団連副会長）

〃 〃 前田福三郎（日本電波塔㈱社長）

監事・齋田慶四郎（勸家族計画国際協力財団

事務局長）

一九八二・三

(三・八、九)

「人口と開発に関するアジア議員フォーラム」

暫定委員会（於・ニューデリー）

参加国・六ヶ国・中国、日本、マレーシア、スリラ

ンカ、インド、オーストラリア

他機関・UNFPA、IPPF、AYCP

日本側・佐藤 隆、井上晋方 他人口問題専門家

特記事項・①一九八一年十月三十日付「北京宣言」に

基づき「Asian Forum of Parliamentarians on Population and

Development (A. F. P. P. D.)」人口と

開発に関するアジア議員フォーラム」

を正式に発足。

②AFPDP発足に伴い、この委員会は

そのままAFPDP第一回運営委員会

となった。

<p>一九八二・二八 (八・二一三)</p>	<p>「人口と開発に関するアジア議員フォーラム」 第一回準備運営委員会 (於…マニラ) 参加国…日本、中国、インド、スリランカ、オース トラリア、フィリピン、他UNDP、UN FPA等 議長…佐藤 隆 ○準備委員会及び大会参加国等について ☆準備運営委員会役員にフィリピンが加わった。</p>
<p>一九八二・十二 (十二・二一五)</p>	<p>「人口と開発に関するブラジル会議」 (於…ブラジル) 参加国…西半球諸国二十ヶ国 議 題…西半球諸国の開発・人口・婦人の地位・ 子供の保護・移民の各問題について。 宣 言…各国に「人口と開発に関する国内議員委 員会」を形成し、議題としてとりあげた 諸問題の改善に向け、積極的に努力する。</p>

<p>一九八三・三 (三・七、九)</p>	<p>元大統領・首相会議設立委員会 (於…ウイーン、ホーフブルグ王宮) 主 催…人口と開発に関するグローバル・コミッテイ 共 催…国連開発計画(UNDP) 発起人メンバー… 日 本・福田赳夫元首相 ウイーン・ワルトハイム前国連事務総長 ルーマニア・マネスク元首相 セネガル・サンゴール前大統領 コロンビア・パストラーナ・ボレロ元大統領 チュニジア・ヌイラ元首相 オブザーバー…イギリス・ヒース元首相 第一回執行委員会…'83年5月東京で開催予定 本会議…'83年秋開催予定</p>
<p>一九八三・五 (五・十九、二十)</p>	<p>元大統領・首相会議実行委員会 (於…東京) 福田赳夫元首相 ワルトハイム前国連事務総長 ボレロ元コロンビア大統領 第一回本会議…'83年11月中旬オーストリアで開催 予定</p>

<p>一九八三・七・七</p>	<p>一九八三・十 (十・十・十二)</p>
<p>財団法人アジア人口・開発協会理事会 厚生、外務、農林水産三省共管認可法人に拡大して 初の理事会で新たに次の十氏が理事に就任。</p> <p>〈人口・開発・食糧分野〉</p> <p>理事…黒田 俊夫(日大人口研究所顧問)</p> <p>〃…川野 重任(東大名誉教授)</p> <p>〃…小林 和正(日大人口研究所教授)</p> <p>〈科学技術・エネルギー・資源分野〉</p> <p>理事…本多 健一(東大工学部教授)</p> <p>〃…森 一久(日本原子力産業会議専務理事)</p> <p>〃…武田修三郎(東海大工学部教授)</p> <p>〈行政OB・官界〉</p> <p>理事…内村 良英(元農林事務次官)</p> <p>〃…翁 久次郎(元厚生事務次官)</p> <p>〃…須之部量三(前外務事務次官)</p> <p>〈経 済 界〉</p> <p>理事…房野 夏明(経団連総務部長)</p>	<p>「人口と開発に関するアジア議員フォーラム」 第二回準備運営委員会 (於…バンコク)</p> <p>参加国…日本、中国、インド、フィリピン、 UNDP、UNFPA、IPPF</p> <p>議長…佐藤 隆</p> <p>○大会参加国等について</p>

一九八三・十一・
(十六、十八)

「元大統領・首相会議第一回総会」

(於…ウィーン、ホーフブルグ王宮)

主 催…人口と開発に関するグローバル・コミッティー
共 催…国連開発計画 (UNDP)

召集者…福田赳夫

議 長…クルト・ワルトハイム (前国連事務総長)
事務総長…ブラッドフォード・モース (UNDP事務総長)

構成国…(二十六カ国)

○日 本…福田 赳夫

○国 際 連 合…クルト・ワルトハイム

○カメルーン…アーマッド・アヒジョ

○イタリ ア…ジュリオ・アンドレオッティ

○ネパール…キルティ・ニデイー・ピスタ

○イギリス…ジェームス・キャラハン

○フラン ス…ジャック・シャバン・デルマ

○タ イ…クリマンサック・チョマナン

○ザン ビ ア…マテイアス・マインツァ・チョーナ

○ハンガリー…イエノ・ホック

○オーストラリア…マルコム・フレージャー

○アルゼンチン…アルトゥーロ・フロンデシイ

○ス イ ス…クルト・フルグラール

○レバノ ン…セリム・ホス

○ルーマニア…マネア・マネスキュー

○ジャマイカ…ミハエル・マンレー

○チュニジア…ヘデイー・ヌイラ

○ナイジェリア…オルセグン・オバサンジョ

○モ ロ ッ コ…アハメッド・オスマン

○コロンビア…ミサエル・パストラーナ・ボレロ

○ベネズエラ…カルロス・アンドレス・ペレ

<p>一九八四・二・十六</p>	<p>○ポルトガルⅡマリア・ド・ルールド・ピントシルゴ ○ユーゴスラビアⅡミチャ・リビチツチ ○西ドイ ツⅡヘルムート・シュミット ○セネガルⅡレオポルド・セタール・サンゴール ○スウェーデンⅡオラ・ウルステン</p>
<p>一九八四・二・十六</p>	<p>「人口と開発に関するアジア議員フォーラム第二回運営委員会」 （於…ニューデリー） 参加国…日本、中国、スリランカ、インド、オーストラリア 議長…佐藤 隆 ○第一回大会の具体的手順及び大会以降の展開について</p>
<p>一九八四・二 （十七～二十）</p>	<p>「人口と開発に関するアジア議員フォーラム第一回大会」 期 日…一九八四年二月十七日～二十日 開催地…インド・ニューデリー 会場…ビギャン・パワン（国際会議場） 参加者…三十一カ国、四十七機関…二百九十七名 (1)日本側出席者 1、名誉団長 福田 赳夫（衆・自） 2、団 長 佐藤 隆（ Ⅱ ） 3、副団長 井上 普方（衆・社） 4、 阿部 昭吾（衆・社民連） 5、 矢追 秀彦（衆・公） 6、 安孫子藤吉（参・自） 7、 柄谷 道一（参・民社） 8、 石井 一二（参・自） 9、 倉田 寛之（ Ⅱ ）</p>

	一九八四・二・二十
<p>(2) 議 長…バルラム・ジャカール(インド国会議長) 司 会…サット・ポール・ミッタール(アジアフォーラム事務総長) 起草委員…石井一二 他五名</p> <p>(3) 主なる日程</p> <p>① 第一日目(二月十七日) 福田赳夫元首相(グローバル・コミッテイ会長)・歓迎挨拶 インデラ・ガンジーインド首相・歓迎挨拶 ヘルムット・シュミット西独前首相基調演説</p> <p>② 第二日目(二月十八日) 黒田俊夫博士「国家開発政策——人口と開発の新次元」講演</p> <p>③ 第三日目(二月十九日) ランジット・アタパト・スリランカ厚生大臣 「スリランカ・住民参加」講演</p> <p>④ 最終日 ニューデリ宣言採択</p>	<p>人口と開発に関するアジアフォーラム・各国代表者会議</p> <p>参加国…AFPFD公式参加国(十六カ国) UNDP・UNFPA・IPPF 議 長…佐藤 隆</p> <p>○AFPFD活動方針と展望、今後の活動計画について</p>

一九八四・八
(八・六十四)

国連・国際人口会議(於…メキシコ)

参加国…百四十九カ国

日本政府首席代表・湯川宏厚生政務次官

日本政府顧問団

田中龍夫(衆議院議員・自)
佐藤隆(衆議院議員・自)
水田稔(衆議院議員・社)
永井孝信(衆議院議員・社)
矢追秀彦(衆議院議員・公)
柄谷道一(参議院議員・民)
石井一二(参議院議員・自)
黒田俊夫(厚生省人口問題審議会委員)
安川正彬(厚生省人口問題審議会委員)

一九八四・八
(十五、十六)

人口と開発に関する国際議員会議(於…メキシコ)

参加国…六十カ国

日本代表団

福田越夫(衆議院議員・自)
田中龍夫(衆議院議員・自)
佐藤隆(衆議院議員・自)
水田稔(衆議院議員・社)
永井孝信(衆議院議員・社)
矢追秀彦(衆議院議員・公)
柄谷道一(参議院議員・民)
石井一二(参議院議員・自)
三塚博(衆議院議員・自)

一九八五・二
(二・五―七)

第一回人口と開発に関するアジア国会議員代表者会議
(於…東京・外務省国際会議室)

主催…財団法人・アジア人口・開発協会 (A P D

A)

出席者…○日本…福田赳夫、田中龍夫、佐藤隆、住

栄作、関谷勝嗣、鹿野道彦、桜井

新 (衆・自民)

安孫子藤吉、倉田寛之 (参・自民)

井上晋方 (衆・社会)

矢追秀彦 (衆・公明)

高桑栄松 (参・公明)

塩田 晋 (衆・民社)

柄谷道一 (参・民社)

阿部昭吾 (衆・社民連)

○オーストラリア…B・J・グッドラック

○中国…許濛新、何理良

○インド…S・P・ミッター

○インドネシア…マルトノ移住大臣

○韓国…モイム キン

○マレーシア…ラーマ オスマン交通副大

臣

○ネパール…ドロン シュム シャーラナ

○フィリピン…カルメンシート レイエス

国務副大臣

○スリランカ…ランジット アタパト厚生

大臣

○タイ…ブンテイウム カマピラド運輸通

信副大臣

日程：第一日目（二月五日）

開会式 APDA理事長・田中龍夫挨拶
内閣総理大臣・中曽根康弘（山崎拓内閣
官房副長官代理）

外務大臣・安倍晋太郎（森山眞弓外務政
務次官代理）

財団法人 日本船舶振興会会長・笹川良
一（同財団理事長篠田雄次郎代理）
がそれぞれ祝辞

人口と開発に関するアジア議員フォーラ
ム事務総長・S・P・ミッター挨拶
感謝状贈呈 財団法人・日本船舶振興会
会長 笹川良一（二月五日夕、マツヤサ
ロンで贈呈）

国連人口活動基金事務局長 R・サラス

基調講演・国連人口活動基金事務局長

R・サラス

本会議・セッションI ランジットア
タパト・スリランカ厚生大臣を議長に選
出

セッションII 問題提起

中国人口基礎調査

黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長）

小林和正（日大人口研究所教授）

インド農村人口と農業開発調査

川野重任（東京大学名誉教授）

大内 穂（アジア経済研究所経済成長
調査部長）

<p>タイ人口と開発基礎調査・社会福祉関連調査</p> <p>黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長）</p> <p>山本幹夫（帝京大客員教授・総合保健研究所長）</p> <p>日本の人口転換と農村開発</p> <p>岡崎陽一（厚生省人口問題研究所長）</p> <p>阿部 誠（厚生省人口問題研究所人口資質部長）</p> <p>日本の農業・農村開発と人口——その軌跡（スライド）</p> <p>第二日目（二月六日）</p> <p>セッションⅢ・Ⅳ 総括討論</p> <p>第三日目（二月七日）</p> <p>セッションⅤ 閉会</p>	<p>一九八五・四 （二十四～二十六）</p>
<p>元大統領・首相会議第三回総会 （於…パリ国際会議場）</p> <p>名誉議長…福田赳夫元首相</p> <p>議長…ワルトハイム前国連事務総長</p> <p>事務総長…ブラッドフォード・モースUNDP事務総長</p> <p>参加国…二十四ヶ国</p> <p>○それまでの、三つの主要課題に加え、人口問題が取り上げられることに決定。</p> <p>○第四回総会は、一九八五年四月、日本で開催される予定。</p>	

	<p>一九八五・五 (十三、十四日)</p>	
	<p>第二回人口と開発に関するインド議員会議 (於ニニューデリー国際会議場)</p> <p>参加者数・約四百名</p> <p>○日本からは、佐藤隆代議員(人口と開発に関するアジア議員フォーラム議長)が、開会式に來賓として出席、基調講演した。</p>	<p>○佐藤隆代議員(人口と開発に関する世界委員会常任理事)が、特別講演を行ない、OBサミットで人類の生存と平和を脅かす「人口問題」を取りあげるよう進言。その結果、主要課題の一つにすることを決定。人口問題に関するタスクフォースを組織し、主幹に福田赳夫元首相が就任することになった。</p>

昭和60年6月30日発行(季刊)

「アジア 人口と開発」 №13

発行者 田中龍夫

発行所 財団法人 アジア 人口・開発協会

〒100 千代田区永田町2-10-2

永田町TBRビル710号

TEL 03(581)7770(代表)